

アオサギ生態観察日記

よ り



渠に帰る親サギ

村 北 利 雄

赴任先は小さな中学校

私がアオサギの生態観察を指導した学校は、小さな中学校でした。中学校が参加する年間の対外競技は全町の、あるいは支庁管内規模の大会など、たくさんあります。これに対して学校といえども、クーパーマン男爵ではないが、参加に意義を感じて参加していましたが、ことごとく敗退、三、四位になれば上々のほうでした。

小さな学校では一人の生徒が何種目にも参加しなければならず、いわば万能選手が必要ですが、このために一人の選手の負担は大きくなり、敗北を喫することとなります。その結果すべてが敗退では、参加の意義より劣等感がもっていくわけで、俺達はやっぱりデッカイ学校には勝てないということとなります。このように敗北感を常に味わうとすれば、自信を失うのは当然のことなので、やればわれわれにだってできる、学校の小さいことなど問題にならないという認識を、なんとか持たせて自信をつけさせたいと考えました。

そこで一種をえらび、個々の生徒が納得のゆくしかも徹底した技の練磨と、基礎的な頑健な体力をつくる、チームの一員として協力の精神を養うということの三つを運動クラブの方針として、クラブ編成の希望

を集めると、男子は圧倒的に野球を希望し女子はバレーがほとんどでした。

しかし、十数名の生徒は体育競技も運動部にはいってやるほど興味もないというところで、無所属として残りました。野球、バレーは若い先生の希望を入れて、担当をすぐ決めましたが、困ったのは無所属の連中だ。どう処理するか、職員会議でも決めかねる始末でした。職員のうち、若い先生二人を運動クラブに回すと、私と女の先生で運動以外のクラブをつくることになりました。女の先生には音楽兼読書クラブを成立させてもらおうとすれば、無所属グループのうち、音楽読書も好まない男子の生徒をなんとかしなければなりません。

私はいつも、どんな人間にも他人にはない良いところがある。子供には秘められた可能性が、必ずあると考えていました。しかし、現実にはクラブ決定の段階でこれらの生徒を引き受けることは口には出さなかったが、内心何をどうしたらよいかと迷いを感しました。しかし職員構成を考えると、私が担当するのが適当と思ひ、そうしてどうせ担当するならば、いさぎよくという気持ちもあって引き受けました。それから、何をどうやるかを考えました。運動関係が不得意な連中だから、科学的なものに興味を持たせてやろうと考え、理科クラブとして、

地元のアオサギの生態観察をやろうと考えました。

郷土の自然を知ろう

私が新しい赴任地の浦幌町吉野中学校へ向かう途中の湿地地の中央の森に、見馴れぬ鳥の巣が二〇ばかり、しかも一カ所に集まっているのが見られました。たかさんの巣が一カ所に見られる状態は、私にとつて

はじめてのことであり、なんだろうと心ひっかかっておりました。

赴任後、すぐに聞きました。がわからず何人目かの人からアオサギらしいということを聞きましたが、それもよくはわからず地元のことを地元の人をもっとも良く知らねばならないのに、しかも、列車の窓からさえ見えるところなのに、という気持ちが理科クラブの発足が、アオサギの生態観察へ

となった動機でした。調査

する場所は、五〇町歩ほどの湿地の中ほどにあるヤチハンノキの森のアオサギのコロニーで、約五〇〇mほどの湿地を歩かねばなりません。これはなかなか大変なことでした。

アオサギの森

クラブの生徒のうち、市街地の生徒二人と私の三人で、日曜日を利用して湿地地に行きました。湿原一帯に葦が繁茂して、高さはちょうど人間が没するほどです。また、二〜三m離れてしまおうと、誰がどこを歩いているのかまったくわから

ない状態です。葦の株は谷地坊主となっており、その坊主と坊主の間は水が溜り、深いところは腰まで浸るほどでした。五〇mも進まないうちに、腰から下はズブぬれで長靴の中で、水がジャブジャブしている始末、それに未知の湿原で緊張もあるのでしょう。全身が汗でビッシヨリ、私自身は赴任して間もない頃で、よく地形がわからず案内者の二人のクラブ員が頼りでした。

しかし、彼らとしても、道路から湿原を眺めてはいたが、湿原に足を踏み入れるのははじめてであり、アオサギについても、湿原の様子についても、私もクラブ員もまったく零から足ではじめたわけです。

湿原の中が、こんなに歩きにくいものとは思いませんでした。汽車の窓からみると湿原は緑の沃野で、葦のそよぎは広々とした景色としか目に写らないのです。このようにして、五〇〇mほどの湿原を歩くのに一時間半近くかかって森の入口に到達し、ここでアオサギの飛翔を目のあたりに初めて見ました。アオサギの普通の飛翔は、S字形に首を折り曲げて飛ぶものですが、この森の入口で見たときの、首を伸ばし、大きな羽をいっぱい広げて飛ぶ有様は、大きいこと大きいこと、こんなに大きい鳥を野性でみるのは初めてで、ただ茫然として息のつまるような感激でした。

同行のクラブ員も、実際に近くで見るとは初めてなので、すごいすごい連発、野鳥というとなズメ、カラス、大きくてトビくらいですから、本当に大きいこの鳥を、丹頂鶴と間違っているということも、もつとも思いました。

この頃の私達の知識は、図鑑の知識程度で、実物を見ていない机上の知識。いまでは私達クラブ員は、どんなに遠くを飛んでいる、どんなに小さい姿でも、一目見てもすぐアオサギかどうか迷わずピタリと当てることができそうですが、とにかく帰校後、確信を得るため図鑑で調べ直して、地元の人がアオサギらしいといっていたのが、本当であることを確認しました。

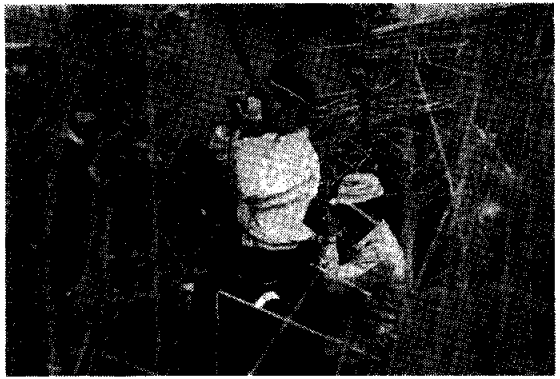
観察第一年後の歩み

クラブ員に、アオサギであることははっきりしたが、さてこれからどうするかと相談の結果、第一に湿原を渡り、森にたどりつくコースの開拓。第二に、どれくらいの数の鳥が来ているのか。第三に、巣がたかさんあるが、どうやってヒナを育てているのだろうか。という三つの点から調べてみることにしました。

湿原に行くには、第一回目の踏査行で森の入口にたどりつくこと自体が難行苦行であるので、自然条件を書きさないように鎌を



巣から落ちた幼鳥の救助作業



探 餌 観 察

的授業中は消極的な連中ばかりだったのでこのように自分から意見を出したり、ことに当たって、どンドン行動化するのをみて本当に驚きました。さて行動が積極的になるにしたがって、森の中にはいる距離も深くなりました。

野鳥は警戒する

われわれが湿原にはいり、森の入口に近づくと、森の様子がなんとなく騒々しくなり、森への侵入者を警戒する様子であることが、感じられるようになりました。森の上空を飛ぶ鳥の羽の動きが、われわれの上空になると、なんとなく早く感じられ、とても警戒心の強い性質を持っていることがわかりました。森にはいると、忍者のように草の葉かげや木かげに身を隠して、鳥の数を数えたり、観察したりしましたが、とても一回や二回でわかるものではありません。飛んでいるものもあり、巣の中のものもあり、餌場に出かけているものもありで正確な数がわかりません。

これをどうするかを、クラブ員相談の結果、同じことを何回もやって数え、さらに森の数カ所の場所から時間を限って、巢の中にはいつているもの、飛んでいるもの、などを一斉に数えることにしました。この方法は、丹頂鶴の調査では以前からやって

第二年度への歩み

新年度、各クラブの成立が学校より認められる以前の、四月入学式の登校日より前年度クラブ員で卒業しないで残っている者は、そのまま理科クラブで継続研究するであろうことを予想して、昨年森に行つた第一回目は五月四日であるが、そのときに飛来しているので、それより早いはずであることに注意するよう、暇があつたらコロニーの観察にかけてみるよう、クラブ員に話をしていました。しかし、新学期の準備など忙しく、生徒も同じ状態のようであつたが、四月八日に自主観察にかけたクラブ員より、六羽飛来していることを報らされ、夕暮れ近く時間がとれたので自転車で行ってみると、確かに数羽の飛翔が見られ、実際には六羽以上の上でした。

半年ぶりに鳥が帰ってくると生徒は興味が出てくるもので、今日は何羽どの方向へ飛んでいたとか、数がふえているようだとか新しい報告がはいり、クラブ員同士の情報交換をするようになって、まだ新年度のクラブの結成がはじまらないうちにどんどん活動がはじまってきました。昨年にくらべて、今年は数が増しているだろうかなどと課題も自分で持つようになりましたが、新しい研究問題もたくさんできました。

森へはいるコースは昨年開発したので、きわめて簡単に湿原を渡ることはできたが森の中には幾本かの川があつて、また森の最奥をきわめていませんでした。森の中の全体の地形を知り、アオサギの餌は何か、参考書では小魚や虫、カエルとなつていますが、クラブとしては事実をまだ確認していません。森の奥にはいるにしたがつて、クラブ員は簡単に発見されてしまい、二〇〇メートルも先のほうから逃げてしまふなど新しい問題が多くありました。

昨年の反省に立つて、今年から写真記録をと思ひ、撮影して現像してみると、フイ



餌をとりきたアオサギ

ルムの中に針の先ほどの点にしか写っていません。それでも、湿原にはいるたびに撮影しました。クラブで利用できるのは借りてきた35ミリカメラ一台で、用品類は自分で処理しなければならぬから限界があつて、たびたび壁にあたりました。カメラのないときは、鳴き声を聞くだけでも良いと腰まで水に浸りながら湿原へクラブ員は通いますが、アオサギの餌は何か、アオサギは通い、テープレコーダーもないので録音はできませんが、鳴き声の変化で警戒の声とか雛の声、これは親鳥が餌をもつて帰つてきたときの声だとか、耳で覚えてきて報告してくれました。

一緒にかけると、先生、いま鳴いている声は親が雛を持ってきたときの声だと説明してくれるようになりました。

先生は生徒から学ぶ

いろいろな生態をたずねると、生徒達は自分が観察して得たことをどんどん話してくれ、このように生徒たちが先生に教えることは、彼らに大変な自信を与えることとなり、研究意欲をさらにかきたてさせるもののでありました。先生は大きい生徒となつて、子供達から説明を聞き、教えてもらうことこそ大事な教育方法であると思ひました。このときの生徒の目の輝き、この意欲は全身ズブ濡れになりながら、それ

に耐えて観察する生徒というより、学究者の姿のように成長するものだ、教師とは生徒より学ぶものだと感じました。

さて、新しい課題として、森の奥にはいるに鳥には気づかれないこと、そのために音をたてないことが、絶対にとつていい条件でした。アオサギは音に敏感で、細い枯れた葦一本折れる音にも、逃げ出してしまふことがわかり、森にはいると手まね足まねの手話法が用いられました。さらに動くものは警戒されるといふことで、いったん発見されると、その場所から動かない、これも絶対といつてよい条件であることがわかりました。ただし、コロニーの森以外では、動くものは逆に警戒されないもので、自転車または自動車はかなり近くを走つても止まらない限り逃げ出すことはありませんが、人間は駄目です。人間は、よほど鳥にとつては警戒すべき動物らしいと、こんな性質も知ることができました。

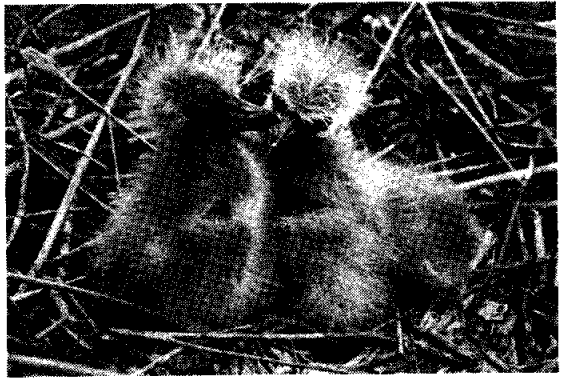
自力で解決する勉強

第三年度目にはいり、昨年は四月八日に飛来していることを確認しましたが、本当は八日に飛来したか、もしくは、それ以前に飛来してきているのかわからぬので、なんとかして、それ以前から観察の必要があると思ひました。しかし、三月下旬から四

月上旬は、学校としてはもつとも忙しいときなので、クラブ内でどうするかが問題になりましたが、卒業したクラブ員は卒業式が終わり、就職や進学の方は、まだ入所式や入学式に間があるといふことで、この期間を観察してくれることになりました。そして、三月二十八日に五羽の飛来を報告してくれました。

湿原はまだ真白に残雪があり、沼の水はまだ解けていなく、餌場がないのに不思議なことと調べてみると、十勝川は氷解して、とうとうと川幅いっぱい水が流れており、餌の心配のないことがつきとめられ、湿原のコロニーは、また冬なのに飛来する理由の一つがわかりました。このことから三月中の飛来という、渡り鳥としてはもつとも早い鳥だ、ということになりました。昨年の反省から写真資料を残すことにしたが、とても小さくて資料にならず、できるだけ大きく撮影するために、近くから撮影の必要がある。しかし、近づくためには動いてはならないという難しい課題もできました。

そこでこの年から、周囲の状態と同じ材料による観察小屋を、菅原樹近くに設置することにして、この課題の解決を試みしました。これより五月中旬くらいまでは、かなり細かな観察ができましたが、五月下旬と



巣のなかのヒナ

なるにしたがって、深緑の枝葉が邪魔になり、観察小屋の俾力はいままでアオサギにクラブ員が発見されて、一時間も湿原で釘づけの立往生がなくなり、この年に食性の正確なことも知ることができました。

営巣樹の下には、フナ、ウグイ、アカハラ、川エビが落ちていたり、巢の中にエビの吐き出したものがあって、食性が参考書と同じものであることを、理解することができました。

協力の苦勞こそ先輩後輩の結びつきをかたくする

毎年毎年が新しい事実の発見となっていたクラブ員は、つぎの年には三月上旬のまだ飛来しないうちに観察小屋をつくることに決め、しかも昨年の卒業生を見習って卒業生が後輩クラブ員のためにつくって残してくれました。このつくり方も、鳥が古巢を利用することを知っていましたので、その巢の位置と、夏の深緑の候には木々の枝の張る状況を推察して場所を決め、さらにどうしても観察に支障を起こすものを整理するなどの処理をし、設置してくれました。前年卒業生の伝統を継いだ、ということになりました。

高校入試終了後、発表までは落ちつかないものですが、その気持のゆらぎを、後輩クラブ員への贈り物として観察小屋の設置でまぎらそうとしたのかもわかりませんが二カ所もつくり、観察小屋のできたところで、三月十六日以降にその小屋に張り込みさらに正確な飛来日をつかまえるといつて森で生活しているような有様でした。三月十九日、四年度目にして、もつとも正確な飛来日をつきとめることができました。

先発隊ともいふべき、アオサギがやってきたことを、後輩のクラブ員と私に、息をはずませながら話してくれ、後輩クラブ員に引き継ぎましたが、私も二十一日にやつとでかけることができ、森の観察小屋に

はいつてみますと、約五〇羽ほどが飛来しているのを確認しました。

クラブの遺産を残そう

クラブができ、観察をはじめて四年目になり、その都度、先輩から生熊の明らかに変わったものを引き継ぎながらきましたが、このへんで記録を整理して「アオサギ」という報告書にまとめてみることにになり、この年、八月より整理をはじめて十二月までかかって終わり、正月元旦、二日、三日をクラブ員は印刷の作業をやり、夜は正月だから私の家に泊り込むことになりました。

元旦から図書室にはいつて、生徒に仕事をつき合わされたのは、教育生活二十年の中ではじめてのことです。クラブ員も元旦からクラブ活動をはじめたというのも、初めてのことだったでしょう。

しかし、面白いことに、元旦といえども普通の日と変わりのないことを認識しました。元旦は一番静かに、自由に仕事のやる日でした。生徒のほうも、元旦からクラブの仕事をするなどというのは、だれも気がつかない「カッコよい」ことだといいました。そんな想い出を秘めて、報告書の「アオサギ」が発行されました。

アオサギの観察に限らず、共通の仕事のために生徒も教師も夢中になることの中に

教育があり、当世流の断絶などはありませんと確信します。このクラブで育っていった者が就職しても進学しても、つねにものごとを工夫しようとする、粘り強く、苦しめても簡単に仕事を投げ出さない忍耐力と観察力を持っていることは、私の最大の喜びです。

(御影中学校教師)

アオサギについて

サギ科の鳥は日本では一八種が記録されているが、本州にはチヌウサギのような白色のものや、ゴイサギなどが多い。しかし、本道はこれらは少なく、アオサギが各地で集団繁殖している。この鳥はサギの中でももつとも大きく、時にはツルと間違われることがある。繁殖地としては野幌国有林、釧路原野、網走湖畔、浦河町、苫小牧市などが知られているが、いずれも林地なので開発の波を受けやすく、さらに採餌地域の減少などで生息がむずかしくなるおそれが多い。本州の日本海側にあったアオサギ繁殖地も、いまだでは減少しているそうであるが、せめて本道で繁殖をつづけさせるようにしたい。

(斎藤春雄)